

LGBTQを 「理解」 するとは ?



昨今LGBTQを「理解」という言葉を様々なところで目にする。今年6月に成立したLGBT理解増進法には様々な批判が向けられているが、企業向けセミナーをはじめ、教育機関における講演などでも、LGBTQを「理解」しようというメッセージはしばしば語られている。また、プライドパレードなどの社会的活動を通して、LGBTQの当事者は、不可視化されてきた自分たちについて「理解」を求めるところを一つの目的としてきた。

しかし、そもそもLGBTQを「理解」とはどのようなことなのか、どのような意味で「理解」が必要なのか、あるいは必要ではないのか、「理解」という概念に遡って検討することも必要だろう。本シンポジウムでは、政治的・哲学的・社会学的な観点からの分析を織り交ぜ、LGBTQを「理解」ということの複雑さやその可能性を検討したい。

講演

理解というマジックワード

松岡 宗嗣 一般社団法人fair代表理事

マイノリティの「理解」とコミュニケーション

三木 那由他 大阪大学大学院文学研究科教員

「LGBTQを理解する／しないこと」をめぐる困難 — 家族、医療でのカミングアウトを例にして

三部 倫子 奈良女子大学大学院人文科学系教員

企画 司会

近藤 智彦 (北海道大学大学院文学研究院准教授、応用倫理・応用哲学研究教育センター事務局長)

斉藤 巧弥 (札幌国際大学観光学部講師、応用倫理・応用哲学研究教育センター共同研究員)

満島 てる子 (7丁目のパウダールーム店長、さっぽろレインボープライド実行委員)



来場には公共交通機関をご利用ください。



北海道大学
HOKKAIDO UNIVERSITY



お問い合わせ

Email: caep@let.hokudai.ac.jp
Tel: 011-706-4088 (平日 9:15-16:00)
URL: <http://caep-hu.sakura.ne.jp/>
Twitter: @caep_hu

2023
10/14 (土)

13:30~17:00 (開場13:00)

参加無料

北海道大学
学術交流会館・講堂 (2F)
札幌市北区北8条西5丁目

対面とオンライン (ZOOMミーティング) にて開催します。
オンラインのみ事前申込が必要です。リンクまたはQRコードからお申込みください。

オンライン定員: 300名
申込締切: 10月13日 (16時)迄



申込フォーム
<https://forms.gle/8i12cxst46Pu65wq8>

LGBTQを 「理解」するとは？



講演 要旨

理解というマジックワード

松岡 宗嗣 (まつおか そうし)

愛知県名古屋生まれ。政策や法制度を中心とした性的マイノリティに関する情報を発信する一般社団法人fair代表理事。Yahoo!ニュースや現代ビジネス、HuffPost、GQ等で多様なジェンダー・セクシュアリティに関する記事を執筆。教育機関や企業、自治体等での研修・講演実績多数。著書に『あいつゲイだって——アウトティングはなぜ問題なのか?』（柏書房、2021年）、共著『LGBTとハラスメント』（集英社新書、2020年）などがある。

「LGBTQを理解しましょう」と言われたら、多くの人が肯定的に捉えるかもしれない。しかし、差別をなくすためには、いったい何をどの程度理解したら良いのか、そもそも理解は可能なのか、理解で差別はなくなるのか。一見賛同しやすい「理解」というマジックワードによって、むしろ問題の所在が曖昧なベールで覆い隠されてしまっていないか。特に「LGBT理解増進法」が成立するまでの約8年間の議論から、理解というフレームによって見落とされてきたものを考えたい。

マイノリティの「理解」と コミュニケーション

三木 那由他 (みき なゆた)

大阪大学大学院文学研究科教員。専門は分析哲学、特に言語とコミュニケーションの哲学。トランスジェンダーであることをオープンにし、トランスジェンダーとしての経験についてエッセイなどで語っている。著書に『話し手の意味の心理性と公共性』（勁草書房、2019年）、『グライス 理性の哲学』（勁草書房、2022年）、『言葉の展望台』（講談社、2022年）、『会話を哲学する』（光文社、2022年）がある。経歴、業績の詳細は<https://researchmap.jp/nayutamiki/>にある。

マジョリティによるマイノリティの「理解」が必要だ、とよく言われる。だが、そのときに「理解」と言われているものはいったい何なのだろうか？ また「理解」が「対話を通じて」形成されるとしばしば語られる。しかし、そのときの「対話」とはいったい何を指しているのだろうか？ 情報伝達に着目したコミュニケーション観とコミットメント形成に着目したコミュニケーション観を比較しながら、「理解」と「対話」について考えたい。

「LGBTQを理解する／しないこと」 をめぐる困難—家族、医療でのカミング アウトを例にして

三部 倫子 (さんべ みちこ)

北海道生まれ。奈良女子大学研究院人文科学系教員（社会学）。これまで子どもから親へのカミングアウト、性的マイノリティの子育て、医療機関における性の多様性などをテーマに、質的調査を用いて研究。著書に『カムアウトする親子——同性愛と家族の社会学』（御茶の水書房、2014年）、論文に三部倫子、影山葉子「医療機関で性的マイノリティはいかに包摂されるか——公立病院と診療所での『家族等』の取り組みを通して」『保健医療社会学論集』34(1)（2023年）がある。他詳細は、<https://researchmap.jp/sambe/>。

LGBTQの可視化につながるカミングアウトは、好意的に捉えられることが多く、それが果たしてきた政治的効果は大きい。他方、カミングアウトをめぐるのは、1)「主体」を遡及的・本質的に構築する、2)「クローゼット」をスティグマ化しやすい、3) ジェンダー非対称性を内包している点など、様々な面から議論がなされている。本報告では、これらの論点を踏まえながら、具体的な事例として家族、医療でのカミングアウトをとりあげ、「LGBTQを理解する／しないこと」をめぐる課題について考えたい。

